上飛騨町（かみひだちょう）

一帯に住んだ飛騨の匠

飛鳥川中流域右岸に隣接して位置する上飛騨町と飛騨町は、古く奈良時代から「飛騨」や「飛騨庄」と呼ばれる一つの行政区画でした。これが江戸時代に入って「飛騨村」と呼ばれることになりました。

明治時代初めに、村南部が「上飛騨村」と改称され南北二つの行政区画に分かれました。明治二二年の行政区画改編で広域の「鴨公村」が新しく誕生し、それまでの上飛騨村が新しい村の「大字上飛騨」となり、さらに昭和三一年の橿原市発足で「上飛騨町」となっています。

藤原京の造営に招集された飛騨匠（ひだのたくみ）が住んだという同町で昭和三五年、藤原京で使った大量の瓦（かわら）を焼いたらしい窯跡（かまあと）が発掘されました。どうやらこの地域の村々は、古代の藤原京造営に伴って形成されたものと考えられます。

町の東寄り字垣内に「旧村社・八幡神社」が鎮座しています。この神社にむかし「風日待」というお祭りがあり、毎年の八月二八日に氏子さんたちが食料持ち寄りで神社の社殿にこもり、徹夜で「風害排除」の祈願をしたようです。